

Index

- #001 鹿児島 p.01
いっぺこっぺ、薩摩名所めぐり
- [特別企画]
#002 「Vision2023」策定に寄せて p.08
・「Vision2023」概要 p.08
・有識者インタビュー p.10
国土交通省 丹羽克彦道路局長
・PC建協が果たす役割と今後の取組み p.14
～インタビューを終えて～
- [名橋をめぐって]
#003 東海北陸自動車道 本谷橋 p.15
新名神高速道路 生野大橋
- [こんなところにPCが!]
#004 広島サッカースタジアム p.20
—日本初の「まちなかスタジアム」—
- [明日を築くプロジェクトの風景]
#005 北陸新幹線(金沢・敦賀間)の p.22
開業とPC橋
- [研究・教育の現場から]
#006 東北学院大学 p.26
コンクリート劣化診断研究室
- #007 仕事場拝見 p.28
- [よくわかる! PC基礎講座]
#008 プレキャスト工法の活用(その2) p.31
- #009 PCニュース ～北から南から～ p.32

今号の表紙 / 黎明みなと大橋 (p.6)

「鹿児島 いっぺこっぺ、薩摩名所めぐり」で訪ねた、黎明みなと大橋をイラストに描いたものです。

謹んで地震災害のお見舞いを申し上げます

「令和6年能登半島地震」により亡くなられた皆さまのご冥福を心からお祈り申し上げますとともに、被害に遭われた皆さまにお見舞いを申し上げます。一日も早い復興をお祈り申し上げます。

広報誌の名称について



は
コンクリート(C)にプレストレス(P)の力が
作用した様子を表現したもので、
「プレス」は定期刊行物を意味しております。

コロナ禍が明けて、久しぶりに会う友人たちとの新年会で薩摩料理店を訪れた。そこで食べた黒豚の美味しさといつたらっ……! やわらかくて驚くほど甘くて、これまで食べてきた豚肉の概念が覆されるようだった。俄然興味が湧き、いろいろと検索してみたところ、鹿児島の大自然で育てられた「かごしま黒豚」は、「薩摩の黒い宝石」と称されていると知った。

「かごしま黒豚」の品種はすべてバー

クシャーで、肥育後期に甘しょ(サツマイモ)を10〜20%添加した飼料を60日以上与え、一般的な豚よりも長い飼育期間が定義付けられているという。平成11(1999)年にはかごしまブランドに指定された。黒豚の発祥地である霧島で、霧島高原純粋黒豚なるものを現地で食べてみたい!という欲望が、旅の最大の目的となった。

春先の休暇の行き先が決まったところで、平成30(2018)年NHK大河ドラマ『西郷どん』に影響されて鹿児島行きを目論んでいたことを、ふと思いつき出す。あの時は実現できなかったけれど、きつと今がタイミングなんだろう。

さらに調べてみて分かったのは、鹿児島のあるこちらに薩摩藩だった頃の名残があるということ。ドラマきっかけに、西郷隆盛を取り立てた島津斉彬公ゆかりのスポットと、隆盛と親交が厚かった坂本龍馬の足跡を辿るスケジュールをピックアップしてみる。目的地は、大きく2つ。1つは、龍馬が妻・お龍を連れて訪れたという霧島温泉郷。2つ目が、薩摩藩主島津家の別邸として知られる仙巖園(磯庭園)だ。

今なお色濃く刻まれている薩摩の歴史と文化を知る、リフレッシュ旅へ出かけよう。

▼ 仙巖園からの桜島
 目前の桜島を築山に、錦江湾を池に見立てた壮大な庭園。海外と繋がる「南の玄関口」と言われた薩摩の歴史にふさわしい堂々とした空間が広がる。

鹿児島

いっぺこっぺ^(*)、薩摩名所めぐり

(*鹿児島弁で「あちこち」)

▼ しらさぎ橋

橋長277m、幅員16mのPC5径間連続箱桁橋。橋の中央部左右にラウンド型とスクエア型のバルコニーが1組ずつ設けられているのが特徴的。バルコニーから桜島や霧島山が望める。



大本命の黒豚にありつく前に
PCの魅力の間近で再確認

降り立った鹿児島空港から一歩外へ出ると、南国の匂いがした。浮き立つ足でレンタカーを借り、さっそく出発する。とにかく目当ての黒豚を！と言いたいのを我慢して、まずは橋に寄り道だ。車で30分くらいの場所にある

▼ 国分川原橋

東九州自動車道の末吉IC～国分IC間に位置する橋長1,146mのPC11径間連続ラーメン箱桁橋。最も高い橋脚は63mある。連続した継ぎ目のないコンクリート橋としては当時国内最長。



しらさぎ橋を通って、東九州自動車道にある国分川原橋を目指す。霧島市を流れる天降川に架かるしらさぎ橋は、橋の中央部にバルコニーがあつて、桜島や霧島山を一望できるビュースポットにもなっている。橋の袂には緑豊かな公園が広がる。市民のための橋であることがうかがえて、微笑ましい。続く国分川原

橋は、とにかく驚くほど橋脚が高い！加えて、非常にスレンダー！頭上高く架かる橋に思わず感嘆の言葉が洩れた。

黒豚の聖地「黒豚の館」で
とんかつの旨みを堪能する

いざ目指すは、この旅最大の目的である「黒豚の館」だ。ここで提供しているのは、パークシャー種純粋黒豚。霧島山麓から湧き出る清らかな水とサツマイモをはじめとする独自の飼料で、35週齢245日の歳月をかけて育てられる黒豚の一番の食べ方は、やつぱりとんかつ。脂肪のさっぱり感に、とろけるゼラチン質のジュシーさが相俟つて、ひと口噛んだ瞬間に身悶えするような美味しさが口内に広がる。弾



▲ 黒豚熟成プレミアムヒレ&ロースかつ定食

一定期間熟成させることでより一層旨味が引き出され、黒豚ならではの芳醇さを愉しめる定食。そのままでも十分だが、少し甘みのある鹿児島産醤油で食べるのもおすすめ。

力ある歯切れの良い肉の味わいを実感して、箸が止まらない！霧島産のご飯ともさすがの相性。黒豚のとん汁、自家製のおぼろ豆腐、サラダ、さらにご飯を進ませる豚味噌が付いた定食に大満足だ。
食後は、犬飼滝の見物に向かう。県道470号線の道路脇に展望台があり、ここから下に滝を眺めることができる。せつかなので、腹こなしに遊歩道を歩いて、滝壺近くまで行ってみる。けっこう急な階段を10分ほど行くと、豊かな水量を誇る純白の帯が現れた。

▼ 犬飼滝

高さ36m、幅22m、滝壺幅33mの滝は、新かごしま百景の第1位にも選ばれた。豪快に水が流れ落ちる迫力ある様子が壮観。





▲塩浸温泉龍馬公園(坂本龍馬・お龍新婚旅行湯治碑)

龍馬を包み込んだ自然、彼が踏みしめた大地、お龍と寄り添った空間が今に残る憩いのスポット。園内には龍馬資料館「この世の外」、龍馬とお龍にあやかった「縁結びの足湯」なども。



▲霧島神宮

天孫降臨神話に登場する神々を祀る神社。千数百年の歴史を有する南九州随一のパワースポットとして知られる。度重なる霧島山の噴火により社殿の焼失と移転を繰り返し、現在の社殿は正徳5(1715)年に建てられたもの。

龍馬とお龍が訪れた霧島は 日本最初の新婚旅行地

実は、坂本龍馬が妻のお龍を連れて訪れた霧島への旅が、日本初のハネムーンだといわれている。慶応2(1866)年に京都伏見の寺田屋で襲われた龍馬は薩摩藩邸に匿われた際、家老・小松帯刀と西郷隆盛から霧島での温泉

療養を勧められる。彼らと共に薩船三邦丸に乗って鹿児島・天保山に到着し、しばらく帯刀の別邸に留まった後、霧島を目指した。龍馬は、犬飼滝について姉の乙女への手紙で、「滝は50間(約100m)も落ちて、この世の外かと思われるほどめづらしき所なり」と絶賛している。
さて、マイナスイオンに癒されたら、

次は塩浸温泉龍馬公園だ。江戸後期の地誌『三國名勝図会』に、刀や斧による傷などに薬効があると記されている塩浸温泉に、龍馬とお龍は18日間も逗留していたらしい。園内にある足湯でここまでの旅の疲れを癒し、30分ほどのドライブで辿り着いたのは、霧島神宮。格調高い朱塗りの社殿が美しい古社で、令和4年に本殿・幣殿・拝殿が国宝に指定されたばかり。立派な大鳥居をくぐって、神橋を渡ると現れる長い階段をゆつくりと上り、樹々に囲まれた表参道の神聖な空気に、深く息を吸う。



▲霧島大橋

霧島川に架かるPC3径間連続箱桁橋。欄干が九面や天の逆針で装飾されており、歩いてじっくり見たくなる橋。

ここ霧島神宮に古くから伝わる9つの面「九面」は、お金などの「工面」に通ずるとする信仰の証。かつては本殿への登り廊下に九面が掛けられ、禍神の侵入を防ぐ魔除けとされていたそう。この九面をモチーフにしたお守りやグッズが人気で、大鳥居の南にある霧島温泉観光案内所近くに架かる霧島大橋の欄干の意匠にもなっている。その大橋をじっくり見物してから、今宵の宿となる霧島温泉郷のホテルへと向かった。



▲九面

それぞれ異なる表情の九面のうち鼻の長い天狗のような面を模した装飾が等間隔に設置されている。



▲ 仙巖園庭園

歴代当主に愛された庭には、徳川將軍家に嫁いだ篤姫や海外の要人たちが足を運んだ。近年では、猫好きの間で、園内にある猫を祀った猫神社(ねこがみしゃ)が注目を集めている。

薩摩藩主・島津家ゆかりの 大名庭園と別邸「仙巖園」へ

龍馬とお龍になった気分朝風呂を満喫し、早々に宿を辞して向かった先は、名勝・仙巖園だ。仙巖園は、江戸時代初期の万治元(1658)年、島津家19



▲ 御殿

島津家歴代が暮らし、国内外の貴客をもてなした建物。江戸時代は別邸として、明治からは一時本邸として使用された。現存する御殿は、1884(明治17)年に改築された建物が主体となっている。

代光久公によつて築かれた別邸で、数ある大名庭園の中でも他に類を見ないスケールを誇る。仙巖の名は、奇岩奇石が多い景勝地として知られる中国の龍虎山仙巖に由来し、幕末から明治にかけて「南の迎賓館」の役割を担った。広大な敷地内には、島津家当主が暮らした御殿をはじめ、現存する最古の石造様式機械工場の建物を利用した尚古集成館、ブランドショップや茶寮など見どころがありすぎるため、半日ほどかけてゆつくりとめぐるつもりで開園と同時に狙う。

まずは、あちらこちらに粹人の妙がりばめられている御殿見学から。丸に十の字(島津家紋)が施された謁見の間に灯るシャンデリア、最高級の屋久杉で造られた藩主の部屋、さまざまな意匠の釘隠しに至るまで……和洋が調和した空間に見る公爵島津家の優雅な暮らしぶりに惚れ惚れした。

光と色彩が織り成す 薩摩切子の美に魅せられて

仙巖園でどうしても見たかったもの——それは、薩摩切子だ。28代当主

齊彬公が作らせたという硝子工芸品は、幾度もの戦禍に吞まれて明治初期に途絶えてしまったが、現存する島津薩摩切子や残された資料・書籍を頼りに薩摩切子を蘇らせるべく、島津家が尽力していると知り、ぜひモノづくりの現場を訪れてみたかったのだ。庭園に隣接する工場では、吹きガラスからカット・磨きまですべての工程が見学できる。職人たちの手しごとを見て、薩摩切子復活への



▲ 薩摩切子工場見学

薩摩切子カット体験をはじめ、薩摩焼付けや大島紬の匂い袋づくりなど、園内では多様な文化体験を通じて鹿児島歴史・文化を愉しく知ることができる。

道程について話を聴き、繊細で複雑なカットを指先で確かめ、光に当てられて澄んだ鮮やかさを増す様子を眺めていると、100年越しの復活が叶って本当に良かった。

代表的な6色はどれも東洋的な深みある色彩で、きらきらと輝きを放つ。中でも「薩摩ノ紅硝子」と呼ばれて珍重された「紅」の発色は難しく、江戸時代当時は薩摩でしか作ることができなかったという。島津薩摩切子の生みの親・齊彬公が内外に自慢した伝統の一角だ。ちなみに、徳川家との婚姻が決まった篤姫に齊彬公が「御焼物・硝子物」を贈ったと伝わる。その硝子物は島津薩摩切子では?と目されているようだ。

併設されたギャラリーショップで気に入った酒器を買い求め、庭園を散策し、もうひとつのお目当てである鶏飯をいただく。鶏飯は温かいご飯に細かくほぐした鶏肉、錦糸卵・



▲ 薩摩切子

薩摩切子最大の魅力は、厚い色被せの技法から生まれる「ほかし」。単文様ですっきりとした江戸切子に対して、複数の文様を組み合わせたゴージャスさも特色。



▲鶏飯
薩摩地鶏のガラから丁寧にとったスープを使った、奄美地方に伝わるもてなしの郷土料理。当初は炊き込みご飯風で、スープをかけるアレンジは昭和に入ってから浸透した。あっさりした優しいスープの奥行きある味わいが特長。

小葱・柚子・もみ海苔・薩摩漬け・甘く炊いた椎茸といった薬味をのせ、あつあつの鶏ガラスープをかけて食べる奄美地域を代表する伝統的郷土料理。かつて、奄美群島が薩摩藩の支配下だった時代に、鹿児島本土からやってくる役人たちの威圧的な態度を少しでも和らげようと作られたのがはじまりだという。貴重な食材だった鶏を余すところなく使ったおもてなし料理に舌鼓を打った。

度重なる災害と闘ってきた 甲突川五石橋の軌跡にふれる

ここからは鹿児島市街地に向けて、桜島を左手に見ながら南下していく。次に向かったのは、仙巖園から車で

5分ほどのところにある石橋記念公園だ。同園は、かつて甲突川に架けられていた5つの大きなアーチ石橋について知ることができ、貴重な施設。約150年にわたって利用されてきた甲突川五石橋は、平成5年8月の豪雨によって2つが流失したことから、残り3橋を移設・復元。実際に歩いて渡ることができるとあって、橋好きには見逃せないスポットだ。特に参勤交代の行列が通った西田橋は、城下の表玄関を飾った藩の威光を誇示した橋で、立派な御門があり、二重アーチと扇状石積みみの壁石、丸柱の精巧な高欄に青銅擬宝珠など配した豪華な造りが見もの。橋下では、古き良き時代の川遊び体験ができる。

▼鹿児島県石橋記念公園 西田橋

1846年に架けられた4連アーチの石橋。九州街道の道筋にあって参勤交代の列も通る鹿児島城下への玄関口であった。移設の際に、西南戦争で焼失したといわれる西田橋御門が再現されており、往時の人々のように橋を渡って御門をくぐることができる。



▲石橋記念館
2階ガイダンスホールでは、県内の石橋に関するデータや映像、パネルや古地図が展示され、1階常設展示室には大型画面やジオラマで石橋の架橋技術や当時の歴史を学ぶことができる。

あって、子どもたちにとって良き水遊びスポットになっている。夏に訪れたら、ひんやりした水に足を浸して涼を取るのもいいだろう。

実物の存在感をその目で確かめた後は資料館に立ち寄って、緻密なジオラマや大型映像でアーチ石橋の歴史を学んだ。架橋技術についても分かりやすく図解されていて、きつと先人たちの知恵と研鑽された技に頭が下がった。1階常設展示室にはアーチ橋づくり挑戦できるコーナーがあり、年甲斐もなく制限時間10分をフルに使って橋を架けるのに夢中になってしまった。悔しいかな、アーチはものの見事に崩れ落ちてし

まったが、架橋の凄さについては理解できたので良しとしよう。

残る数多の銃弾跡が 戦争の凄惨さを今に伝える石垣

隣接する祇園之洲公園にある薩英戦争砲台跡を前にして、しばし戦争の悲惨さについて考える。そんな気持ちを抑え、日本最後の内戦とされる西南戦争の爪痕をこの目で見るため、銃弾跡が残る石垣へと車を走らせた。

西郷隆盛が鹿児島島の士族たちのために創設した私学校跡の壁と対峙しながら、近代化を逸早く推進した名君・斉彬公の偉業についてもっと知りたくなった。身分が低かった西郷



▲西南戦争の銃弾跡
西郷隆盛が創設した私学校跡の石垣に見られる多数の窪みは、西南戦争における政府軍の凄まじい攻撃を今に伝える。

を側近として登用し、活躍の場を与えた斉彬公は、幼少の頃から外国文化に強い関心を抱き、鉄製大砲を製造するための反射炉を築かせ、蒸気船・ガス灯・薩摩切子などの製造を後押しすることで藩の近代化を推し進めた。13代将軍・徳川家定の継嗣問題で幕府の大老・井伊直弼と対立し、その最中の安政5（1858）年に急逝した。彼が夢見た新しい近代国家をつくるという夢は、西郷をはじめとする薩摩の若者たちに引き継がれ、今なお、その熱量は薩摩に暮らす人々に受け継がれている。

2日目の鹿児島市内をめぐる旅は、薩摩ものの気概を感じるスポットめぐりとなった。

旅のよはやっぴり橋で！ 新旧2つの橋を愛でるひととき

鹿児島島のシンボルでもある桜島をバックに架かる天保山橋の悠々とした姿を眺めるため、甲突川下流までやってきた。情緒あふれる佇まいの天保山橋は、平成10（1998）年にRC橋からPC橋へと架け替えられた橋。昭和10（1935）年建造の旧天保山橋にあった和風高欄と石灯籠型の親柱をそのまま使用することで、景観に寄り添う姿になっている。昔の面影を垣間見ることが出来る文化

▼天保山橋

甲突川に架かる橋長116m、幅員14mのPC4径間連続桁橋。現在の橋は平成10年に架け替えられたもので、旧橋（昭和10年建造）の和風高欄と灯籠風親柱を引き継いでいる。



的価値のある橋だと言えるだろう。

天保山橋の周辺を散歩した後は、いよいよ最後のスポット、黎明みなと大橋だ。まずは橋を車で走り抜ける爽快感を体感する。そこから橋の全景を確認するため、桜島が借景となるポイントへ移動した。車から降り立つと周囲にはサツマイモを炊いたような甘い香りが満ちていて、なぜだかほつとする。世界の大型客船が寄港するマリン

ポートかごしまの南国らしい景色が目前に広がる同橋は、鹿児島市の宇宙2丁目〜東開町を結ぶ新ルートとして住民に親しまれている新しい橋だ。県内外から寄せられた応募の中から選ばれたその名称には、「新時代の幕開けにふさわしい勇氣と希望を与える橋」「桜島から昇る朝日が見える大

▼黎明みなと大橋

橋長430mのPC6径間連続ラーメン箱桁橋。桜島や錦江湾の景観に配慮するため、橋桁の厚さを薄くするなど、全体的にスリムに見えるように設計されている。マストの高い小型船舶も通行できるように桁下高は15mある。



橋」という意味が込められている。人々の希望を背負った大橋と、その後ろにうつすらとしたシルエットが浮かぶ桜島をぼんやり眺めながら、昨日今日を思い返す。

欲を言えば、今やコンビニでもお馴染みになった鹿児島名物「白熊」も食べたかったし、黒豚だつてとんかつだけじゃなくしゃぶしゃぶでも味わいたかった！霧島で龍馬とお龍の足跡を辿り、西郷どんゆかりの地で彼の生き様を知ること、本気で日本を新しくしようと願った幕末志士たちの心意気を頼もしく感じたり、志半ばでこの世を去った斉彬公の無念に想いを馳せたり——。鹿児島の歴史と文化にふれ、自然と温泉とグルメと満喫した2日間は本当にあつという間だった。

それはそうと、仙巖園のスタッフさんから聞いた話がとても印象深かった。朝から雨で桜島に霧がかかっていることを残念がっていた私に教えてくれた、「こういう雨を島津雨って言うんですよ」という言葉。これは、初代忠久公が雨の中で生まれたという言い伝えにちなみだもので、鹿児島では雨は吉兆とされるそうだ。鹿児島を訪れた旅行者に対しても、「あいにくの天気ですね」ではなく「島津雨で良かったですね」と声をかける、薩摩心が身に染み込んだのだ。



霧島大橋 (p.3)



鹿児島県石橋記念公園 西田橋 (p.5)



しらさぎ橋 (p.2)



国分川原橋 (p.2)



天保山橋 (p.6)



黎明みなと大橋 (p.6)

鹿児島

いっぺこっぺ、薩摩名所めぐり

旅MAP

